
変わった“家族”と危険（周りの人にとって）な日常

nooth-glim

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わった“家族”と危険（周りの人にとって）な日常

【Nコード】

N6867L

【作者名】

nooth-glim

【あらすじ】

僕の名前は、笹月葎。足が速い以外は、何の変哲もない平々凡々な中学生だ。

ただし・・・僕単体で考えた場合だけだね。

狂った・・・個性的な幼馴染達に、毎日振り回されっぱなし。これが必要ならばなあ・・・。

と思つてたら、衝撃の事実。ええ？実は全然幼馴染じゃない？三ヶ月前に会ったばっか？

しかも・・・魔術師？超能力者？それに、“選定者”に“記憶の番

人”だつて?!

・・・いつからここはファンタジーになったんだ!

空の迷子に出てくる登場人物と、ほとんど同じキャラが出てくる事になると思います。

あつちは更新出来そうにないですが、キャラには未練大ありますか・・・。

まだまだ全然ファンタジーではありません。あらすじ、ネタバレだらけですね。

Prologue 1

ほんのり赤く頬を染め、微笑む少女。淡い黄色の目と薄い茶色の髪が、光の加減で金にも見える。

美しい。この表現がピッタリだ。誰もが、見惚れてしまうだろう。

・・・状況が状況じゃなければ。

「ホラホラ、立って？」

少女は、目の前の黒髪の少年に手をさしのべる。

健全な男子なら、すぐに立ち上がるだろう。だけど、僕は立ち上がれない。というか、その手をとることも出来ない。

だから・・・普通の状況じゃないんだってば。

「あ・・・いいかげん帰してくださらないでしょうか・・・？」

誰が聞いてもすぐに分かる。声が情けないくらい震えて、かすれていた。

「ダメ　ふふふつ、ホント葎っていい声で啼くよね・・・
ゾクゾクするわ」

DSなのかッ？　このクラスメートは！

・・・前から知ってたけど。

そう、少女の手には鞭が握られていた。

さっきまで、僕は彼女にこれで打たれていたわけだが。

「それに、これはお仕置き、罰よ。罰を罪人の都合に合わせるわけには行かないでしょう?」

彼女は、そう言って鞭を振る。空を斬る鋭い音が、はっきりと聞こえる。

・・・ヤバイ、これ以上食らったら、マジで死ぬ。

こうなったら・・・

「サイナラっ!」

僕は、ボロボロの体に鞭打って一（というか、さっきまで実際に打たれてた）立ち上がり、全速力で駆け出した。

「あ、コラッ!」

もちろん、彼女も追ってくる。

彼女は陸上部所属。しかも一年生の時からずっとエースと呼ばれていた。それだけではなく、陸上のすべての距離において都の記録を持っている、らしい。

・・・要するに、人並外れて足が速い。普通だったら、逃げ切れないだろう。

・・・だけど、僕も普通ではないんだな。

「クッ!」

後ろで、彼女は苦しい声をあげる。

角を何度か曲がると、追ってこなくなった。

「……………ハア」

僕は、大きく溜息をつくと、壁に寄り掛かるようにしてしゃがみこんだ。

……………わー、服がボロボロ。制服じゃなくてよかったけど、新しいの買わないと……………。

「……………死ぬかと思った」

毎回同じこと思ってるけどさ。あいつは……………いや、“あいつら”は、狂ってる。

「あら、笹月くん……………こんなところで、どうしたんですか?」

ふんわりとした、優しい口調に振り返ってみると、そこにいたのはプラチナブロンドの髪に、エメラルドグリーンの瞳の少女。

「……………朶かよ」

誰か心優しい人が……………!と思ったのに……………。

……………今、「普通にまともそうじゃん」とか思った奴! 確かに朶は“他の奴ら”に比べたら十分“まとも”だが……………
……………やっぱり、ブツ壊れてる。

なかなか表面に出てこないから、たちが悪い。

「何でも無いよ」

そんな思いを押し隠して、僕は答える。

・ ・ ・ 見た目からして全然何でもなくないが、きっとこいつなら ・ ・ ・

「そう ・ ・ ・ なら、早く帰った方がいいですよ？それでは、私はこれで」

そう言って、栞は去っていった。

ほら、な。こいつは、どんなことでも大抵スルーする。

ヒュー ・ ・ ・

風が吹き抜ける。

・ ・ ・ さすがに寒いな。早く帰るか。

Prologue 2

ん・・・

僕は、ベットから起き上がって思いつきり伸びをする。
窓から、朝日が差し込んでいる。

ああ、平和だ。

心から、そう思う。

・・・学校では、こっちは行かないけど。

耀珠学院。

「葎、おっはよ！」

背中に、ドスンと衝撃が走る。誰かが、抱きついてきたのだ。

「いッ・・・！」

ふ、古傷！古傷があッ！

「あ、ゴメン 昨日の傷、治ってないのかあ」

昨日だけじゃねえよ！三ヶ月前のだ！

むしろ、三ヶ月よりも前のが残ってないのが不思議だよ・・・。

抱きついてきたのは、昨日の茶髪美少女。ちなみに、名前は宵闇更紗。

「……語尾に黒いものを感じるんだけど……」

「気のせいでしょう？」

更紗は、ニツコリと微笑む。……その裏に、黒いものは感じない。だがッ！油断は禁物だ！

こいつは、驚異の詐欺女だ！最凶の嘘つきだッ！

……知ってるのは、“家族”以外では僕だけだけ。

「更紗、手加減してやれって言ってるだろ？」

そう言ってくれるのは、黒髪に深緑の目、高等部の清白椋。更紗とは“家族”。冷静沈着、頭の回転が速い。学院一の秀才だ。……まともに見えるが、“ある事柄”に関することだと、暴走する。ほんとだよ？

「更紗、早い。お弁当、忘れてったよ？」

その後ろからやってくるのは、焦げ茶の髪に鮮やかな橙色の目、同じく高等部の塚護燎。更紗達“家族”の世話を、全部やっているらしい。主に家事。

暴走しなけりゃ、最高の先輩、最高の幼馴染なんだけどな……。

「おはよう兄様、燎、更紗。……あと、おはよう笹月くん」

僕の後ろから、ひょこつと顔を出したのは清白美月。僕のクラスメ

イトで、柊の妹。

暗い、灰色がかった銀の髪に、濃紺の目。かなりの美少女だ。

・・・あんまり柊とは似ていない。特に、髪と目。

“家族”を最優先にする傾向があり、その他の人は二次三の次。今の挨拶がいい例だ。

ちなみに、柊が暴走するのは、美月がらみするとき。このシスコンが！

「皆様、おはようございます。ご機嫌いかがですか？」

「今日も騒がしいなあ」

若干遅れて、二人やってくる。

すぐく礼儀正しい方が、羽良真幌。もう一人が、雛上刹那。

真幌が純白の髪と目、刹那が漆黒の髪と目という、すごいツートンカラー。

ちなみに、学院公認のカップル。ラブラブで・・・リア充爆発しろ！

カップルといえば更紗と燎もそうだけど、それを言うと・・・恐ろしい。

普段穏やかな燎まで、ああなっちゃうんだもんなあ。

「おはようございます」

「よっ！律、元気か？」

「おはよー！」

おや、全員揃った。

敬語なのが、昨日もあった桜陽菜、ノリが軽いのが五十嵐汀、最後

の元気なちびっこが龍瀬ひな。ひなは、唯一の初等部だ。

・・・にしても、こいつらホントにインパクトあるよな・・・。本当に日本人なのか？

汀は濃紺の髪に空色の目、ひなは黒髪に紫の目。

「ホラホラホラ！急がないと、遅刻するよ！」

燎が、手をたたきながらそういう。幼稚園の先生かよ。でも、確かにまわりに人がいない。

僕らは、慌ててそれぞれの校舎へ急いだ。

Prologue 2 (後書き)

この後、一話を書いたら設定を書きます。

Chapter 1

中等部校舎、2 - 4 教室。

・・・疲れた。

授業は、二時間目が終わったところ。何だが・・・

「ねえ・・・」

「・・・ああ」

「どうします?」

・・・さっきから、栞と美月と汀が、なにやらこそこそ話している。というか、様子がおかしい。

よし、聞いてみよう!

「いったい、どうしたんだ? さっきから」

「え・・・」

美月は、固まってしまった。

おーい、ホントにどうしたんだ?

「な、何でも無いですよ! ねえ?」

「う、うん! 何でもない、何でもない」

・・・非常に怪しい。

「見てきたよ！」

更紗が、教室の扉を勢い良く開けて入ってきた。

「更紗、どうだったか？」

「やっぱりだよ。もう、間違いない」

「・・・あんま、信じたくねえけどな」

汀がすぐに駆け寄り、そこでまた意味不明の会話。

「いったい、なんなんだよ！」

「・・・すぐ、準備しよう」

更紗が、そう言って教室を出て行く。

他の三人も、それに続いた。

・・・隠し事？ちょっと寂しい・・・。

三分後。

四人は、まだ戻ってこない。もう、授業始まるぞー！

・・・と。

初めに異変に気づいたのは、学級委員の八代ひかる。

「な、なに？」

彼女の声に振り返ってみると、そこには変な黒い物体が浮いていた。

「ウニヨウニヨしてる・・・キモイ」

スライム状（not ドラクエ）のそれは、ウネウネと空中を動きながら八代の方に近づいている。

「うわっ！ 近寄ってきた！」

彼女は、思いっきり後ろに下がった。

・・・その瞬間。

「キャアッ！！」

黒スライムが、飛び散った。

いや、正確には・・・分裂した。

「な、何なの・・・」

教室にいる全員がパニックってるようだが、足がすくんでしまったのか、誰も動かない。

文章で見ると面白いかも知れないが、実際見ると怖いぞ？

・・・得体の知れない生き物を前にして、誰も音を発しないという

のは。

・・・僕は多分ただ一人冷静だったと思う。

だけど、下手に動いちゃいけない気がした。なんか・・・勘？

分裂した黒スライムは、またウニヨウニヨと動き始める。

そのうち一つが、八代の方にまた近寄ってきた。

・・・ヤバインじゃないか？なんかよくわかんないけど・・・

八代は、顔をひきつらせる。

その時。

ヒュンッ

何かが入口の方から飛んできて、黒スライムに刺さる。

・・・黒スライムは、一瞬で消えた。

「・・・ッ、ギリギリセーフ、かな？」

・・・すぐく、聞き覚えのある声。僕は、入口の方に急いで振り返る。

「・・・更紗？ 一体何がどうなってるんだ？」

そこにいたのは、両手に何故かナイフを大量に持った更紗と、汀。ふたりとも息を切らせて、普段と違う真剣な雰囲気だった。

「・・・動けるんだったら、早くここから逃げろ！」

いきなり、汀が怒鳴る。その声に気圧されて、思わず一步後ろに下がった。

「ああもう、そっちに動いちゃダメ！ どうせならこっちにして、よっ！」

いつの間にもやら真横に来ていた更紗が、僕を思いっきり入口の方に突き飛ばした。

「うわっ！」

汀が受け止めてくれるかと思ったが、そこには誰もいなかった。廊下の壁に、正面衝突する。

「……あたしの（俺の）名は……」

後ろで、二人は同時に何かを呟く。

「何すん……だ？」

文句を言おうと思って、僕が振り返った。そのとたん。

ゴオッ

「ッ!？」

突然の突風と、渦をまく大量の水。その勢いに、黒スライムは一瞬で消え失せた。

・・・そこにいたのは、汀と更紗であり、違うもの。
見た目は同じだが・・・根本的に何かが違う。

「・・・汀？ 更紗？」

「外来種と思われる“命持つ呪い”を大量に発見」

「ッ?!」

更紗が、いきなり淡々とした口調でそういった。

「更紗・・・？ 意味わかんないn「効力は“命喰らい”。既に増殖していると思われる。被害者は、今のところ無し」

今度は汀。普段からは考えられないくらい、感情の無い声。

目が、なんか遠いところを見ているような・・・焦点があってない？命を感じられないというか・・・
・・・わーッ！変な想像はやめようよ、僕！

「「これより、“Traveler”による殲滅作業を行う」

二人同時にそう言う。

・・・と、目に光が戻った。

「え、つと・・・汀？ 更紗？」

おそろおそろ、声をかける。

「・・・はあ、やっぱり意識“向こう”につなげんのはキツイ」

「殲滅作業始めるっても……もう柊達が粗方片付けちゃってるよね？」

……戻ってるみたい。さっきのは、なんだったんだ？

「……あれ？ 葎？ ……何だって起きてるの？」

更紗が、たった今僕に気づいたように、言う。
起きてるのって……

「起きてたら、ダメなのかよ」

「ダメ」

即答された……。

よくよくまわりを見てみると、教室内の全員が、床に倒れ込んで眠っている。

「おつかしいな……突き飛ばすと同時に催眠周波出したはずなんだけど。なんで寝てないの？」

「いやなんでと言われても……」

更紗は、首を捻りながら言う。催眠周波？なにそれ？

……もしかして、それはいわゆる催眠術の一種？

「……起きてたつてことは、さっきの風と水とか、上への報告とかも全部……見てたんだよな？」

僕は、一回コクリと頷く。
報告って……さっきの淡々としたのだよな？

「……………どうしよう」

「いや、俺に聞かれても……………」

二人は、顔を見合わせて困ったように言う。
……………どうも、僕が知ってはいけないことだったらしい。

「……………柊に言うか」

「それしか無いよね……………」

柊？さっきも言ってたよな……………燎でも、栞でもなく、柊。
……………なんか一番すごい人？

「葎……………今日にしたこと、それと今から見聞きすることを、絶
対に人に言わないと約束してくれる？」

更紗が、真剣な眼差しでそう言う。
僕は、また頷く。

「じゃあ、こっち来て」

汀が、僕の手を引っ張って、窓の方に来た。そのまま、窓を全開に
する。

「え？ え？ 一体、何？」

「舌かむなよ」

「はい？」

そして・・・窓から突き落とされた。

「ええええーッ！」

2 - 4 の教室は、三階にあった。

地面にぶつかったら、死ぬからッ！

そう思った途端、不思議な浮遊感に包まれ、そのまま意識を失った。
。。。

Chapter 1 (後書き)

なんかグダグダ？展開が早い気もするし・・・
感想とアドバイスを、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867/>

変わった“家族”と危険（周りの人にとって）な日常

2010年10月10日02時31分発行